



制服の世界  
THE UNIVERSE OF UNIFORMS  
世界の制服

天使といえば、西洋絵画ではだいたい翼がある男の赤ん坊。なのに「白衣の天使」といえば若い看護婦とどういうわけか相場が決まっていた。男女ひっくり返るめて看護婦とよぶのがふつうになってきたが、「白衣の天使」では、ことばのニュアンス的に患者が気易く接しにくそうだ。

## 白くなくても「白衣」

おたが  
大谷 かがり 中部大学助教



ピンクの白衣

### 廃止されたナースキャップ

看護師の白衣はさまざまな消費のされ方をしている。当人たちにとっては、速乾性と伸縮性に優れた機能的な作業着、看護のプロであることを自覚させる記号。見る者にとっては、優しい、あるいはそうあってほしい白衣の天使、ときに女性のシンボルとしてフェティシズムの欲望がかき立てられるがため、コスプレでは横綱格。

看護師は白衣とナースキャップを着用していたが、ナースキャップは頻繁に洗濯できず不潔で、仕事の邪魔になるなどの理由で、日本では多くの病院で廃止になったのではないかと思う。しかしながら、今でもネット上では、ナースキャップをかぶった看護師のイラストが容易に検索できるとし、先日夜中にテレビを眺めていたら、看護師という設定の女の子

ので「板のようだった」と表現する大先輩もいたほどだ！、ばりばりばりばりと音を立ててのりをはがしながら袖を通したのだそうだ。木綿の白衣は何十年と洗濯され続けていくと生地が摩耗し、縮んで薄くなつていく。大先輩のは往々にして透け感のあるミニスカートとなり、なかなかセクシーであったと記憶している。

わたしが就職して二年目から、勤めていた病院では、白衣のデザインがスカートタイプとパンツタイプ、レギュラータイプの襟と丸襟が選べるようになった。素材も速乾性と伸縮性に優れたものに変わった。わたしは、患者さんをベッドから車いすへ移動させるときに、スカートでは動きにくかったことから、パンツタイプを好んで着用した。

現在は、デザイン、生地、ブランドもさまざまな白衣が市販されている。日本でも人気があり、テレビ放映されていたアメリカのドラマ「ER 救急救命室」の登場人物が着ていたスクラブ(半そでのVネックTシャツ)

がナースキャップをかぶってミニスカートをはいていた。世間では今でもナースキャップをかぶっているイメージが強いらしい。

### 「板のようだった」白衣

最近ではピンクや水色、紫など、カラーバリエーションも豊富であるが、いまでも「白衣」とよぶ。ナースキャップが廃止になり、白衣のデザインやスタイルに幅をもたせやすくなった。

わたしは一九九〇年代に市民病院に就職したとき、木綿の白い白衣を着た。病院の地下一階に洗濯室があり、職員の白衣はそこで一斉に洗濯されていた。戻ってくる時にはきちんとアイロンが当てられていた。当時先輩に聞いた話では、以前はとても硬くのりづけされて戻ってきたツツを着用している看護師も見受けられる。病院は各施設の特徴や雰囲気に合わせて戦略的に白衣を選ぶようである。

### プロフェッショナルにかわる装置

白衣を着ると、看護師はスイッチが入る。わたしの場合は、病院の地下一階に降り更衣室で白衣に着替えるとき看護師の自分に切り替わった。エレベーターに乗り込み、職場がある病棟七階でドアが開いたとき、プロフェッショナルとしての気持ちが一〇〇パーセントとなる。たとえば、目の前で食道静脈瘤を患う人が大量に吐血をし、あつという間に意識を失ったとしても、すぐさまバイタルサインを測定し、声をかけて励まし、仲間に応援を頼み、医師を呼ぶことができるだろう。白衣とは、どのような状況のなかでも看護師として行動させる装置なのだ。



看護学生だったわたし。戴帽式の朝。初めてかぶるナースキャップに胸が躍った。左から2番目、机にもたれかかっているのが筆者



白い白衣(パンツ)



白い白衣(スカート)



スクラブ